

## 第4回 冬の章 「王朝文学の冬の風景——清少納言が見た雪——」

赤間恵都子

### 枕草子の季節

『枕草子』の季節は何かと問われて、春を思い浮かべる方は多いと思います。「春はあけぼの」の冒頭が有名だからでしょう。しかし意外に冬の情景が多く描かれている作品です。

冬の景物として文学上なくてはならないものは雪です。『枕草子』には香炉峰の雪の段をはじめとして、印象的な雪の情景を描く章段が少なくありません。「本意なきもの(物足りないもの)」という章段に、「冬の雪降らぬ」とあることなどから考えると、清少納言は冬が好きというより、雪が好きだったと思われます。では、清少納言はどのような雪を見たのでしょうか。

### 宮廷で見た雪景色

「春はあけぼの」の冬の段には、早朝、降り積もっていた白い雪の輝きと炭火の光が描かれています。寒さを凌ぐ火が焚かれた場所は、清少納言が仕えた宮中でしょう。これは、後宮生活での作者の体験を綴った『枕草子』のプロローグになっていると考えられます。

『枕草子』で最もよく知られている香炉峰の章段でも、雪が重要な働きをしています。中宮の問いかけに対して『白氏文集』の詩句を連想し、それを行動で示して賞賛を浴びたという話は、清少納言の自慢話と読まれることもあります。しかし、女性が自立し社会で認められることの意義を主張する清少納言にとって、忘れられない出来事だったのでしょう。その出来事を導いたのが雪でした。

宮仕えに自分の居場所を見つけ、生来の才能を花開かせていった清少納言も、初めて宮廷に上がり中宮定子と対面した時は、大変な緊張ぶりでした。定子との緊張の対面を終え、ほっと一息ついたとき、登華殿の庭に降り積もった雪が目に入ります。極度の緊張で寒さも感じなかったのですが、外では初雪が降っていたのです。



それは定子との初めての出会いの記憶と結びつく雪景色でした。

### 定子周辺の歴史的変動

清少納言が仕え始めた頃、中宮定子是一条天皇の唯一の后として時めいていました。しかし、父の関白道隆が病死すると、一族の栄華に陰りが見え始めます。定子の兄で道隆の後継ぎだった伊周は叔父の道長と政権争いをするようになりますが、長徳2年1月に弟隆家と共に花山院に矢を射掛ける事件を起こし、4月には左遷されてしまいます。その後も次々と不幸に見舞われながら、定子是一条天皇の第一皇女を出産しました。

翌長徳3年、伊周・隆家の罪が赦された年の6月に、一条天皇は世間の批判を承知で定子を自分の近くに呼び寄せました。その場所が大内裏の職御曹司という建物です。

ここは中宮関係の事務を取り仕切る役所で、内裏内までは入れない中宮定子の微妙な政治的位置を表していました。関白道隆が生きていた時代とはうって変わって、道長に遠慮しながら生活する日々でしたが、『枕草子』の定子周辺には決して暗い影がありません。むしろ、以前より笑いが多く描かれているくらいです。その中に雪が重要な働きをする章段があります。

### 職御曹司の雪山

12月中旬に大雪が降りました。職御曹司の庭では大きな雪山が作られ、その雪山がいつまでもつか女房たちが賭けをすることになりました。その時、清少納言が最も遠い日にちを予想して、雪山が消えないか大騒ぎするという、一見、他愛ない話が語られています。

しかし、これを歴史背景と重ね合わせると重要なことが見えてきます。賭けの途中で急に内裏に参入することになったという記述があり、これが約3年ぶりの定子の内裏参入を示しているのです。しかもその結果、定子は第一皇子を懐妊することになります。皇子が誕生すると、中関白家が再び政界の中枢に返り咲く可能性が生じるのですが、それは政権掌握を目指す道長を大いに刺激する事態でした。

すなわちこの章段では、皇子誕生という定子一族の運命に関わる記述を、慎重に、さりげなく明示するという大きな役割を雪が果たしているのです。

### 定子葬送の日の雪

中関白家最後の期待を担って生まれた皇子の行く末を、定子は見届けることができませんでした。その後、定子は再び身籠り、出産直後に24歳の若さで亡くなってしまふからです。

『枕草子』が黙して語らない定子の死について、『栄花物語』は大きく取り上げています。定子の葬送は12月下旬の大雪の日に執り行われました。『枕草子』には語られない最後の雪は、定子の死と結びつく冷たく悲しい雪でした。

清少納言が見た雪は、王朝文化を彩った定子後宮の栄華と凋落の運命と結びつくものであり、決して忘れられない風景として作品内に記されたと考えます。

ご清聴ありがとうございました。



